

[原 著]

## メアリ・シェリーの母親言説

金丸 千雪\*

### Mary Shelly's discourse on motherhood

Chiyuki KANAMARU\*

#### Abstract

The purpose of this study is to investigate Mary Shelly's discourse on motherhood in relation to her first novel *Frankenstein*. Mary Shelly's own connections to motherhood are complex. Her mother died when she was only an infant, and she never ceased to idealize and long for her lost mother. She had her unhappy relationship with her stepmother. Moreover, she suffered from grief over the death of her young children. Under such circumstances, *Frankenstein* expresses both the daughter's longing for maternal nurturance and her fears of becoming a mothering woman herself. Reconsidering these issues, we will discuss reproductive health as basic human rights of women.

**KEY WORDS**: Mary Shelly, motherhood, *Frankenstein*, reproductive health

#### 1. はじめに

『フランケンシュタイン』(1818)は、1931年にアメリカで映画化されたことも影響して、ホラー小説として多くの読者に楽しまれているばかりか、数々の小説やアニメや漫画、ドラマ番組の素材となっている。映画によって、その名前が世に知られたことはよいとしても、フランケンシュタインについて残虐な本能をもって、自分のいく手に出会う人間たちを無差別に殺す怪物というイメージが固定されてしまった。ヴィクター・フランケンシュタインは、怪物を創り出した研究者であるのだが、怪物であるという誤解がそこから生まれている。また、実際の小説を読むと確かに怪物は三度、人を殺すが、それは行き当たりばったりではない。ヴィクター・フランケンシュタインが愛してやまない人たちを、怪物は襲うのである。創造主フランケンシュタインの弟、ウィリアム、その次が彼の親友であるクラ

ヴァル、最後に彼の婚礼の晩に妻のエリザベスが怪物の標的になる。創造主から愛されなかった怪物は、創造主が愛するものを襲う。さらに、その怪物の見掛けは醜いが、実に繊細な感受性をもっている。この名前を与えられなかった怪物のことを、多くの人々は間違えてフランケンシュタインと呼んでいる。

さて、この怪奇小説が特に近年、大学の英文学専攻コースで読まれてしかるべき作品になったのはなぜだろうか。それは文学技法、修辞法、文学批評の視点から教材に適切である、との見方が強まったからである。1980年代に、フェミニズム運動の一環として従来の英文学史を修正する作業が活発に行われた結果、『フランケンシュタイン』というテキストの構成力が特に高く評価されている。それとともに、19歳でこの小説を世に出したメアリ・シェリー(1756-1851)への関心が高まりつつあるのだが、今現在、わが国では彼女の詳細な伝記はほとんど書かれていない。彼女は自分の

\*九州共立大学スポーツ学部

\*Kyushu Kyoritsu University Faculty of Sports Science

人生そのものからの想像でこの作品を創作したので、その生涯を概観することは大いに意味があると思われる。そこで、『フランケンシュタイン』を解説する上で鍵となる事項、すなわちメアリ・シェリーの特異な生涯の中で重要な事実となる母親との関係について小論で考察したい。彼女の身のまわりに起こった様々な出来事の中でも、母子関係を軸にした関係に焦点を当てると、『フランケンシュタイン』で提示されている、リプロダクティブ・ヘルスが女性の人権であるという現代的な課題がより理解しやすくなる。さらに、それは今後大いに展開されるだろう新しい読みへのきっかけとなるだろう。

ここでは、1938年に出版されたR. Glynn Gryllsによるメアリ・シェリーの伝記を主たる情報源としている。なお、1951年に出されたMuriel Sparkの*Child of Light: A Reassessment of Mary Shelley*が、1987年にタイトルを変えてメアリ・シェリーの伝記として出版されているが、その情報に拠るところが大きかった。

## 2. 母親の喪失

メアリ・シェリーの人涯を語る時、避けて通れないことがある。彼女の両親の名前は、今なお生き続けているということである。現代の女性解放の思想と実践の歴史を遡っていけば、必ず『女性の諸権利の擁護』(1792)に行き着く。この著者こそ、メアリ・シェリーの母親のメアリ・ウルストンクラフトである。彼女は女性の従属状態という不正を是正し、変化のきっかけを与えた点において今日のフェミニズムの基礎を築いたのだが、いわゆる“a hard-faced ‘blue-stockings’”<sup>1)</sup>ではなかった。頑迷で視野の狭い女権拡張主義者からは程遠く、彼女は男女の価値のある関係を重視していた。彼女は性的な愛情すなわち恋愛の性質をはかないものと考え、友情の中にこそ、男女の永続する関係があるとみた。彼女は結婚そのものを否定したのではなく、金銭的な実力の証拠として夫が妻を扶養する生活様式を批判した。問題なのは、有閑階級の妻たちの怠惰さ、つまり子育ては乳母まかせであり、何一つ自分の頭で考えようとしないうる依存性であった。彼女は述べる、「現在の状況では、妻は夫に忠実である。妻は子供にお乳を飲ませないし、教育もしない。そういう人は妻の名に値しないし、市民の名に値する権利など持たない。」<sup>2)</sup> その彼女が哲学者ウィリアム・ゴドウィンと出会い、結婚したのは自然の成り行きであった。

ここで、ゴドウィンの社会改革を唱える執筆活動が、どれほど精力的なものであったかを振り返る必要がある。ウィリアム・ゴドウィンは、『政治的正義』(1793)を著して「理性」の名前のもとに無政府主義の理想を説いた。彼らが生きた18世紀後半は、いわゆる、ロマンティシズムの時代である。ロマンティシズムとは、想像力を働かせて物事を思考する過程で、ロマンスの魅力に導かれて個人の主体に絶対的な確信を持つことである。個人の精神は活発に作用することを願う。そして、その探求は、革命、つまり抑圧的な社会秩序を打倒したいという思いと全く矛盾しない。近代社会へと移行している激動期において、「アメリカでの独立運動、フランス革命はロマンティックという信仰に現実味を与えた」<sup>3)</sup>のである。さらに、イギリス国内では、馬車が蒸気機関車に取って代わる動力革命によって、人々の生活は急激に変化する。それは、自由主義が発達する兆しでもある。理神論(deism)が衰退して、人間個人の内部に目が向けられ、感受性や独自性が重視される。それは時代を広く見据えた自由主義思想を基盤として革命的な精神を鼓舞したのが、まさにメアリ・ウルストンクラフトとウィリアム・ゴドウィンであった。彼らの交際相手は、文学や芸術や科学に造詣の深い文化人たちであったので、彼らの間で知的な議論は日常茶飯事であった。文学界に名をはせたこの二人の間に生まれた娘が、メアリ・シェリーである。

小論の核心は、母親のメアリ・ウルストンクラフトがメアリを生んで10日後に産褥熱で亡くなったという事実にある。この死は、母親メアリがお産に対する男性の管理体制を拒否したこととも関係している。メアリは産科医ではなくて、産婆を選んだ。彼女が産婆を雇ったのは、同性の人間の能力に頼みたい、つまり女性に職業の門戸を開くという意図があった。産婆によって無事に子供は生まれたのだが、胎盤が排出されない。そこで男の専門医が呼ばれるが、医師の胎盤摘出手術の失敗と衛生上の不注意も加わって、メアリは生まれたばかりの赤ん坊の顔も見ることなく、ひどく苦しんだあげく息を引き取る。<sup>4)</sup> 娘メアリの誕生は、母メアリの死と引き換えであった。その後、父親ゴドウィンは再婚をしてメアリは継母に育てられるが、メアリと新しい母との関係はうまくいかない。メアリは新しい自由を追い求め始めた。彼女は日々の継母との摩擦を避けるため、息苦しい家庭から逃げるようにして、亡くなった母の墓場に本を持って行き、そこで本を読むという習慣を身につけた。そこで、継母よりも偉大な知性をもつ母と魂の会話を交わし、学問の道を志そう

とする。母親のことは周囲から聞かされるだけであり、見たことも話したこともない。当時の上、中流階級の女性たちは商業、及び知性を要する世界一般からあえて遠ざけられていた中で、女性であり続け、しかも優れた知性の持ち主であった母に、全能の母をメアリは感じ取る。彼女の内部で亡き母のイメージは膨らみ、理想的な姿として形成されていく。母を理想化すればするほど、自分の生が母の死を招いたことに罪悪感を持ち、その死はメアリにとって永遠に克服できないものとなってしまう。

疑いもなく、彼女が抱き続ける喪失感、あるいは母の死の束縛が、『フランケンシュタイン』に投影されている。若い科学者ヴィクター・フランケンシュタインの養母は、作者メアリ・シェリー自身の実母と重なり合っている。フランケンシュタインの父母は愛情深く、孤児であるエリザベスを養女として引き取る。ある日、エリザベスはしょう紅熱で倒れるが、「家庭の天使」の役割を果たす母親の手厚い看病によって救われるが、疲れた母親は感染して命を奪われる。娘が献身的な母の死を招いたのである。死から生が得られたことへの恐怖心は、その後のプロットで展開されている。エリザベスは、フランケンシュタインとの婚礼の夜に怪物に殺される。各器官を寄せ集めつぎはぎされて生み出された怪物が、創造者のフランケンシュタインを憎悪したのも、彼から見守られるどころか見捨てられたからである。フランケンシュタインが創造後の翌朝に研究室に戻ると、子供と想定される怪物は逃げている。それに対して、彼は“the wretch-the miserable monster whom I had created”<sup>5)</sup>と、あたかも他人事のように思い出すだけであり、その行く先を追いか求めようとはしない。茶色いうるんだ目をした子供の怪物は、信頼関係、つまり母と子という基本的な体験が欠如したまま、他者との関係に入る。彼は他人との交わりにおいても、その醜い容姿が災いして人々に拒絶されていく。その過程においても母からの働きかけはないため、彼の正常な感情は発達しない。ついに、神をも恐れぬ野心と企てによって創造された怪物は本物の怪物と化して、生みの親に復讐をするという破壊的なエネルギーを発揮する。怪物の残虐さあまりない行為において、逆説的に彼の親への愛の一途さが証明されるのも否めない。

では、フランケンシュタインが愛したのは一体、誰なのだろうか。彼が婚約者のエリザベスを真剣に愛していたとすれば、彼は自分が行った恐ろしい実験を彼女に告白したであろう。人間世界において何の絆も持

たない怪物が、彼に仕打ちをする可能性を彼女に告げるならば、その危害が彼女の身にふりかかることが事前に察知でき、不幸を未然に防止できていたかもしれない。エリザベスはフランケンシュタインの父親が強く勧めた、彼の婚約者であり、彼にとって法的には姉妹であるが、血縁関係にはない。フランケンシュタインと怪物が擬似親子関係であるように、彼とエリザベスの夫婦関係は広義の近親相姦と言ってもよいかもしれない。この不可解な関係や混乱は、フランケンシュタインの夢の中で象徴的に表れている。夢の中で、彼はエリザベスにキスをしようとするが、彼が彼女の唇に触れると、彼女は死を想起する鉛色になる。さらに、彼が抱きしめていたのは、死んだ母親の体であった。その夢は、彼の怪物への嫌悪感と、恋人と母親という最愛の二人の身体に起こりえる衝動感と密接につながっている。作者メアリ・シェリーは、被害と補償といった合理主義の文脈では決して捉えられないストーリーを創出している。産む母となるフランケンシュタインが作者の分身であるならば、親の犠牲者と同時に親を破壊する怪物もまた作者の分身だからである。夢、妄想、迷信の世界は曖昧ではあるが、作者の心の深層に潜む無意識を対象化することで、その意味が把握できるであろう。次章では、母親の喪失から母の愛を追求めた子供時代を経て、今度は自分の子供の誕生を体験し、さらにその子供の死の悲嘆にくれたメアリの恐怖や不安について検討する。

### 3. 母の自己決定権

女性がセクシュアリティや生殖において何らかの決定をしようとする際には、それは社会的に女性が置かれている位置と関連している。つまり、メアリの母親体験は、法や政治、社会的な規範、パートナーや家族との関係性と絡めて考察すべきである。そこで注目しなければならないのは、母のメアリも本人のメアリも社会道徳の好ましい体系から逸脱したということである。母メアリと父ゴドウィンの幸福な結婚生活は、メアリの死によって5ヶ月で終わっている。メアリが妊娠すると、生まれてくる子供が非嫡出子として世間から疎外されないように二人は考えて、その時点で正式に結婚したので5ヶ月なのである。

世代は変わって、その子メアリは16歳にして、妻子のある詩人パーシー・シェリーと駆け落ちをする。シェリーと妻ハリエットの間にはすでに二人の子供がいるが、彼らの夫婦関係はすでに破綻している。ハリエッ



トにとっては結婚による保護は何よりも大事なもので、シェリーとの離婚に応じない。メアリのほうは、シェリーの学識の広さに接するにつれ、その事情を承知で彼に惹かれていく。実際、シェリーは、「当時の人にしてはめずらしく、才能があり十分な教育を受けた若者」<sup>6)</sup>であった。自由主義者であるはずの父親ゴドウィンは娘メアリの恋愛に激怒し、娘の行動を決して許そうとはしない。自由恋愛を唱えたゴドウィンは、一体どこにいったのだろうか。彼の『政治的正義』を貫いていたのは、政治制度ばかりではなく結婚という独占所有と束縛の制度を打破しようとした彼の過激な合理主義であったことを忘れてはいけない。ゴドウィンはメアリにとって父親であると同時に、先生であった。寓話や神話や騎士道の世界を通して、彼女の想像力を目覚めさせて精神形成を促したのは父親である。当時の一般的な女性とは異なり、メアリは進歩的な父親から幼少期を通して知的訓練を受けたばかりではない。ゴドウィンの家庭を訪れる知識人たちの間で交わされる文学論に聞き耳をたてることによって、彼女は知的に好奇心を刺激され、多くの本を読むに至っている。父親のように、彼女は世俗的な規範ですべての物事を割り切る滑稽さを知っている。彼女は何とか萎縮せずに奔放自由に生きようと決意した時、シェリーと共に大陸へと渡る道を選ぶ。当然、17歳のメアリは、父親が国外へ出ることを禁止する法的な手続きをとることを非常に恐れた。しかし、父親側にも事情があった。文筆を生業とする父親は、折からの印刷業界の不景気で、金銭的に苦勞をしていたためにシェリーからの後援を当てにしていた。シェリー自身は金持ちではないが、彼はなんと言っても貴族の家柄にあたる。こうして娘と父親との信頼関係は途切れたというよりも、お互いが共感しあうことができなくなったのである。

メアリは一抹の不安から、冒険好きな義妹、ジェーン（のちにクレアと改名する）を連れていくことにする。ジェーン自身も同行を強く希望した。こうして、21歳のシェリーとジェーンと共に、彼女は革命後の荒れ果てたフランスをまわり、スイスのブルンネンに落ち着く。しかし、2日後にはまた移動、ドイツ、オランダを経由して帰国する。ロンドンに帰ると、彼らは経済的に行き詰まり、転々とした惨めな生活を送っている。メアリは理性を超越した世界に解放された自由を感じ取ると同時に、恐怖をも大きかったはずである。それは、父親という権威者から逃げおおせても、本来のあるべき姿を逸脱した者が味わる罪の意識と言える。この間に、シェリーの本妻であるハリエットは、2番

目の子供を生んでいた。翌年の1815年、メアリは17歳にして最初の子供を産むが、その子は生後まもなく死亡する。翌年、彼女は二人目の子供ウィリアムを産む。ウィリアムは3歳の時、ローマで病死している。彼女の最初の子供が7ヶ月で亡くなった時、彼女は次のような手紙を友人ホッグに書いている。

My dearest Hogg my baby is dead---will you come to me as soon as you can---I wish to see you--- It was perfectly well when I went to bed--- I awake in the night to give it suck it appeared to be sleeping so quietly that I would not awake it---it was dead then but we did not find that out till morning---from its appearance it evidently died of convulsions---

Will you come---you are so calm a creature & Shelly is afraid of a fever from the milk-for I am no longer a mother now.<sup>7)</sup>

ホッグさま、私の子は亡くなっています。できるだけすぐに来ていただけませんか。一お会いしたい。一床についた時は、赤ん坊は元気でした。私はおっぱいをあげようと、夜中に起きました。あまりに静かに眠っているようなので、起こさないようにしようと思いました。その時、死んでいたのに、私たちは朝まで気づきませんでした。様子からすると、明らかにひきつけで亡くなったのです。

来てください。あなたはとても穏やかな人ですもの。シェリーはお乳がはって発熱することを恐れています。私はもはや、母ではありません。

学識のあるメアリがevidentlyをevidentlyと書く間違いをしている。母となる喜びを受容できなかった無念さや無力さが象徴されていると言えよう。わが子への可愛い、愛おしいという感情が、赤ん坊からのサインや接触の中で誘発されて、母子一体感は最高に達している。親密で特別な関係が遮断されたのである。彼女に癒しは必要である。しかし、夫のシェリーは妻の体の異変を恐れるばかりで、妻の心の傷を慮る余裕がないことがほのめかされている。そこで、メアリが慰めを求めたのは、シェリーのオックスフォード時代からの友人であるホッグである。Gryllsによると、「メアリは特にホッグに惹かれたのではなく、抽象的な自由恋愛という恋人を求めた」<sup>8)</sup>のである。そこに

は、メアリの心痛と苛立ちがある。駆け落ちする時に連れてきたクレアがシェリーにまとわりついて離れない。彼らの三角関係は、時にはうまくいき、時にはメアリにとってクレアは二人の世界への侵入者となる。メアリも含めて皆一様に、他者との間に適度な距離を取れていないのである。さらに、人間関係のねじれは続いている。彼女が最初の子供の死で嘆き悲しんでいた一方で、彼女の異父母姉妹であるファニーが自殺した。追い討ちをかけるように、シェリーの妻ハリエットが二人の子供を残して自殺した。ハリエットはメアリに対する嫉妬や恨みが増大するにつれて、わが子への関心が薄れたのであろう。母性を発揮するには、心の余裕が必要なのである。夫シェリーはその死を自分ではなく、ハリエットの家族のせい、特に父親への家の出入り禁止を言い渡した姉のイライザのせいにした。ハリエットは、シェリーとの間にある葛藤が積みもって破滅したに相違ない。ハリエットの子供たちの誕生を、両親は心から望んだとは思えない。早婚のカップルは、子供を産み育てるという覚悟も心の準備もできていなかったのではないだろうか。

そこには、子供の数と、出産の間隔、そして時期を自由にかつ責任をもって決定できない女性たちの悲劇が横たわっている。人工妊娠中絶が宗教によって規制されている場合は、逆に不確実で危険な避妊が用いられ、妊婦の生命への危険性を高める場合も少なくない。また、出産時に命を落とす頻度は高く、乳幼児の死亡率も高い。メアリの場合を考えても、彼女の子供は最終的に4人のうち3人までが赤ん坊である時に死んでいる。17歳で母となる体験をしたからこそ、メアリは書くという行為で創造した『フランケンシュタイン』において、生物学的に創造する、すなわち「母親になるという不安」<sup>9)</sup>を投影できたのである。例えば、フランケンシュタインは生殖テクノロジーを用いて、怪物を創っているにもかかわらず、そのプロセスで彼は心理的、身体的な異常を訴えている。彼は、その仕事が完成したことを次のように述べている。

After days and nights of incredible labour and fatigue, I succeeded in discovering the cause of generation and life, nay, more, I became myself capable of bestowing animation upon lifeless matter. (52)

昼夜を問わず、“labour” したのだと彼は言う時、この“labour”は「労働」の意味で取るのか、それ

とも「出産、分娩」の意味を読み取るのか、それは明らかである。その前にある“incredible”（信じられないほどの）という形容詞と、その後の“fatigue”によって陣痛で疲れ果てたイメージが喚起されている。フランケンシュタインは男性であっても、産みの苦しみを味わったのだ。しかし、彼はすぐに否定している。「いや、私自身で生命のない物質に生氣を与えることができるようになった。」と言う。この表現は男性的である。まず、独力で可能にしたという独立心と権力が、彼に満足感を与えている。次に、“bestow”は称号や名誉を「授ける」ことである。彼には世代から世代へと受け継がれる生命を創造したという自覚がない。なぜならば、「天と地の秘密」(10)を発見するために彼はひたすら勉強に励み、人間付き合いもしなければ、すばらしい自然の移り変わりを見ることもしない。

It was a most beautiful season; never did the fields bestow a more plentiful harvest, or the vines yield a more luxuriant vintage: but my eyes were insensible to the charms of nature. (55)

自然はあくまでも美しく、恵み豊かな秋の訪れでぶどうは実をつけている。しかし、彼は自然環境を克服するという、古代からの夢の実現に取り組んでいるので、自然に対して何の魅力も恩恵も感じない。

とは言っても、心理的、身体的な異常が彼にもたらされている。Sandra M. Gilbert and Susan Gubarが指摘しているように<sup>10)</sup>、彼は神経が苛立ち発熱する。産後の身体の不調は、“exercise and amusement would... drive away incipient disease” (56)として示される。運動と娯楽が病気の初期の症状を追い払うという説明に、肉体の苦痛が伴う産前と産後の女性のイメージが暗示される。ここで、先ほど紹介した、メアリのホッグへの手紙が思い出される。メアリは産後、心理的な意味における保護や安心感を与える愛情表現をシェリーに求めたのだが、それらを与えられなかったのである。子供の権利を守る義務を十分に果たしていないシェリーを一方的に責められない。メアリが彼女の文学において、我々に問うているのは、どうすれば人は心を満たされ、他人に寛大で平和的になれるかということなのである。もっと言えば、必要とされるところに、経済的、社会的、政治的なサポートを与えようともしない社会の冷淡さへの怒りである。

#### 4. まとめ

メアリ・シェリーが19歳で『フランケンシュタイン』を創作した原点に、彼女の母親喪失と、自分自身の母親体験がある。無理やりに母と娘の絆が切断されて、乳幼児期に母との一体感をもてなかった怪物こそ、愛に飢えたメアリ・シェリー自身である。また、生物学的母子関係を抹殺する生殖テクノロジーで怪物を創出したフランケンシュタインもまた、正式な結婚の枠内で健康に子育てができなかったメアリ・シェリーである。彼女にとっての脅威は、法と秩序、父、象徴界の権威ではなく、無意識に矛先を向けてしまう、絶対的な存在の母であった。人工人間の開発に従事する研究者は、そこで出来上がった怪物を邪魔者同然に置き去りにする。このプロットにおいて、科学のおかげで人間は勝利を収め、自然をおとなしく従えるようになったというのは、果たして真実なのか問われている。メアリがこの作品を書いて以降、科学技術は科学が人間に与える恩恵の膨大な証拠を積み上げていった。土地の裂け目に橋をかけて山々にトンネルを通し、汽船で海に乗り出し飛行機は空を飛んだ。現在は生殖細胞を操作することを通して、生命の支配を目論んで企んでいる。しかし、フランケンシュタインの強烈な名誉欲が怪物の精神破壊をもたらしたように、先進工業国の飽くなき欲望が第三世界の自然環境破壊をもたらした。

メアリは、性や妊娠・出産に関する事柄を健康という視点から捉えて、それを個人、特に女性の基本的な人権として保障できていない社会の在りようを見たのである。今日、リプロダクティブ・ヘルスが女性の人権として明確に認識されるようになってきた。1980年代を契機として人々に広く認識されている。リプロダクティブ・ヘルスとは、人間の生殖システム、その機能と過程のすべてにおいて、単に病気や障害がないというだけでなく、身体的、精神的、社会的に良好な状態であることを示す。従って、安全で満ち足りた性生活を営むことができて、子供を産むか産まないか、いつ産むかを決める自由をもつ。とはいうものの、生殖に関する問題を抱えた女性が、自己決定する状況がまだ十分に保証されているとはいえない。特に近年、我が国では少子化対策で矮小化された対応しかなく、加えて、核兵器からの放射能や、産業廃棄物からの化学物質など、様々な複合汚染が環境を破壊し、あらゆる生命に脅威を与えている。メアリ・シェリーは母なる自然を完全支配する恐怖を

文学で表現することによって、未来の脅威を予感したのである。

#### 注

- 1) R. Glynn Grylls. (1969): MARY SHELLEY. Haskell House Publishers, New York, p.8.
- 2) Mary Woostonecraft. (1983): A Vindication of the Rights of Women, Miraim Brody (ed), Penguin Books, Harmondsworth, p.259.
- 3) Meena Alexander. (1989): WOMEN IN ROMANTICISM: MARY WOLLSTONECRAFT, DOROTHY WORDSWORTH AND MARY SHELLEY. Macmillan, London, p. 7.
- 4) 野島秀勝 (1987): 女の伝記: ロマン主義の時代を生きて 研究社出版, 東京, pp. 95-104.
- 5) Mary Shelly. (1969): Frankenstein; or, The Modern *Prometheus*. rpt.: Penguin Books, Harmondsworth, p.58. 以降、同書からの引用は、括弧内に頁数を入れ本文に記入する。
- 6) Muriel Spark. (1987): MARY SHELLEY: A BIOGRAPHY. Meridian, New York, p.32.
- 7) Mary Shelly. (1995): Selected Letters of Mary Wollstonecraft Shelly, Betty T. Bennett(ed), The Johns Hopkins UP, London and Baltimore, p.8.
- 8) R. Glynn Grylls. (1969): MARY SHELLEY. Haskell House Publishers, New York, p.48.
- 9) Ellen Moers. (1986): LITERARY WOMEN. The Women's Press, London, p.92.
- 10) Sandra M. Gilbert and Susan Gubar. (1979): THE MADWOMAN IN THE ATTIC: THE WOMAN WRITER AND THE NINETEENTH-CENTURY LITERARY IMAGINATION. Yale U P., New Haven, pp. 232-233.